

# 赤祖父先生の思い出

三宅 光一

私は昭和51年4月に筑波大文芸・言語研究科各国文学専攻に入学した。一般文学専攻の所属ではなかったが、それ以来、思えば長期にわたって赤祖父哲二先生の薫陶を受けて、成長してきた感が強い。まず何よりも、この場を借りて、学恩に対する日頃の感謝の気持ちを表わしておきたいと思う。

以前からどこかでこの気持ちを形にしたい、と希望していたので、比較・理論文学会から原稿募集の通知が来たとき、もっけの幸いと筆を執らして頂くことにした。さて、どのように思い出の記を書くか、いざとなると、さまざまな思いの切れ端が頭の中を駆け巡って、一どきに表現の出口を目指して混雑を極めているようでもある。あれこれ思案していく内に、ふと気がつくと、大学院時代からもうこんなにも長い年月を重ねていたのかとびっくりする。そして、今年度で先生は惜しまれつつも、退官されるのである。私ばかりではなく、今までご指導を仰いだ幾多の院生や留学生もまた同じ思いに耽っていることであろう。また同様に、学究生活の基盤を開拓して頂き、また数々の示唆とアドバイスを頂戴した者は、ひとり私ばかりではない。この思いは、元院生仲間の一人ひとりの心の底にも、無言の言葉となって鳴り響いていることと思う。以下でささやかながら、私の眼に見えてきた先生の筑波大での姿の一端なりとも語ってみたいと考える。

今の在学生には想像すらつかないだろうが、私の入学当時、筑波大学自体が建設途上にあった。キャンパス内の樹木は、建物の人工的で殺伐とした風景の中に、取って付けたような恰好をしていたが、今や完全に地面に根づき、キャンパスも人間の温もりが感じられる居住空間に変貌し、違和感はなくなった。隔世の感がある。当時、教官や院生の研究室は勿論なく、せいぜい教官たちの寄り集まる職員室みたいな部屋が、第一学群棟の一角に確保されているだけであった。そのためか、教官たちに面会を望んでも、不在が目立った。無理もない。周辺は野原の只中という印象がふさわしく、近づくすべの限られた「陸の孤島」であった。未完成の東大通りは、いたる所で掘り返され、荒川沖までの通路がいまだ確保されていなかった。暗やみに大学の明かりだけが、不夜城のように煌々と異様に輝いていた。夕方になれば、

だれも速やかに「脱出」したのである。何もないときは、ロビンソン・クルーソーになる可能性(?)があった。降雨の後は、未整備の道路がぬかるみに変わり、長靴を持参しなければならなかった。第二学群が二年後ぐらいに完成して使用可能となったが、そこへ行くのに、林のあいだ(今の中央図書館のあたり)をけもの道のようにすすり抜けていったものだった。図書館は、体芸の図書館が建設を終わって、一応機能していたが、旧教育大所蔵の本ははまだ移管されていないし、文科系の書籍が全くといってよいほど揃っていなかった。最低限の必要な本すら入手できず、いらいらした気分陥った。(今では反対に、学内の書架の蔵書がかなり充実してきている。そしてレファレンス業務のおかげで、学外からの借用の簡単に来て、その便利さには大変感謝している次第である。)大学院の開設講義の数は不足しており、お世辞にも充実しているとは言えなかった。研究環境の点からは、ないない尽くしの有様であった。無謀にも紙と鉛筆だけで学問の土俵に立たなければならないとは全く信じがたいことであった。先行研究の調査や斯界の先達の見解を知る機会もなく、手探りで進めていくことへの焦りや不安がしだいに募っていった。入学試験の際に感じられた何か新しいものへの胎動と活気、それが一番の魅力であったのだが、そのような積極的な印象は、結局のところ、建設ラッシュの工事の槌音だった。学群の後輩の中には、工事関連のバイトで働き、文字どおり大学の建設に内と外から携わった剛の者もいた。新しいはずである。建設途上なのだから。その新鮮な雰囲気にも惑わされて、うかつにも学問的環境の素晴らしさだと錯覚したのだ。合格していた他大学を選んでいれば、もっと充実した院生活が送れたのに、と当時悔やんだことは一度や二度ではない。今振り返ってみても、薄氷を踏む心境で過ごした日々の連続であった。そしてその時の方向づけは、いまだにいびつな影響として残り続けている……。

このように悪条件のさなかで、とにもかくにも大学院生活を送っていった。もちろん、人生は悪いことばかり続くわけではない。捨てる神があれば、拾う神がある。心に焼き付いて離れない何人かの先生方に会ったという素晴らしい事があった。赤祖父先生は、そうした方々の中でまず第一に指折れる方である。大学院在学中、先生の演習にはほぼ毎年受講させて頂いた。また筑波大は、その頃の日本としては珍しく随分留学生の多い大学であった。これも幸いなことの一つであった。学生宿舎が完備しているので、留学生が特に希望の大学を指定しない限りは、筑波大へ手配されるとのことであった。それで台湾、スリランカ、フィリピンを始めとして、マレーシア、豪州、韓国、アメリカ、またエジプトやドイツ、中国大陸からの出身者など、いろいろな外国人と交流の機会に恵まれた。人生は人とのめぐり会いである、とよく聞かされるが、そう考えれば、充実の大学院生活にも見えてくる。付き

合いが深まり、また広がるにつれて、国際的な問題や日本の伝統に関心を抱き、今日の問題や行く末について思いをひそめるようになった。特に欧米関係の領域に足を踏み入れていると、つつい欧米の価値基準と見方に照準を合わせて、その他のものが見えなくなるが、留学生からの刺激は視野を大いに拡大してくれ、それに引きずられる形で、脚下照顧の自覚を促してくれたのである。

赤祖父先生の演習でも、毎年何名かの留学生が受講に来ていた。いろいろな人と知り合いになり、個人的な交流ができた。あるいはまた稀に演習当日の夕べ時に、皆で近くのレストランに出向き、先生を囲んで文学談義やよもやま話の花を咲かせたものである。人数も増え、その形態は年々盛んになっていった。先生の単身赴任宿舎で、時に山形先生、荒木先生なども加わってかなり面白い話の展開になったこともあった。当時は何の感慨も抱かず、ごく当たり前のように話の輪に加わっていたが、今から考えると、大切なひと時を持ったものだと思う。物事には、さし当たり重大に感じなくても、十年二十年の単位でその意義が新たに分かるような事柄がある。この場合が、まさにそうであった。

先生の学問的な面でいつも感心することは、驚くほどの知識量とその広さである。どちらかと言えば、前提に基づいてこせこせと築き上げていくやり方に慣れた私にとって、先生の博覧強記に触れると、自分の視野の狭さに一つの衝撃が加えられる思いがして、それが常に新鮮な印象を受け、魅力的に映った。これは、たぶん革新的な試みを敢行しようとする姿勢と不可分なのであり、いろいろなものに根本的な疑いのメスを入れようとする若々しい精神の現われに他ならないのだ。当時の私は、不遜にもそのように推察させて頂いていた。博学を背景にして大胆な発想と展開をされる場合、正直に言って、歩調を合わせてついていけない自分を感じた場合もあった。あるいはまたしがみついていた自分の考えを崩されるために、どうしようもない戸惑いとしんどさに襲われ、理解不能に陥ることもあった。時としてこうした気分にもなったが、しかし、それに何十倍もする刺激的な示唆と貴重な意見、発想、テーマなどを頂戴した。誰しもそうかもしれないが、他人の優れた所は見習えが、私の場合の信条なので、広い視野をもって望むべきことを痛感させられて、すぐさまそれを踏襲した。以来、さまざまなものに目を向け、広く柔軟な態度で接し、カメラのレンズのように焦点を絞って小さく捉えると共に、大きく捉えること、いわば両眼で捉えることを、曲がりなりにも実践してきたつもりである。現在、「日本の思想」「独語」「栄養学にまつわる英語講読」「新聞記事を取り上げる講義」など、文学とは無縁な教科を担当している。(しいて文学に関連があると言えば、「児童文学」の講義である。) 今後「食物の歴史」を担当せざるを得ないかもしれない。こうした多様な科目を受け持てるのも、つくづく広い視野をもってやって来たおかげ

だ、と有難く感じている次第である。

今は記憶がかなり薄れてきているが、たしか最初の頃、先生の演習では、西欧の文学理論を古代から現代に至る幅広い歴史的回顧の中で捉え直すといった内容が主流であった。それから文芸上の個別的な問題点や特定の理論、学派、作品の掘り下げが顕著になったように見受けられた。イーグルトンや構造主義、ディ・コンストラクション、修辞学論、語り手の問題、葉山嘉樹など多彩であった。大脳生理学やコンピューターを始めとする最先端の科学的成果も話題の端にのぼった。なかには興味を覚えないうテーマもあったが、従って何気なしに聞き流していた内容があったが、後になって、それがふいに重要なものとして浮上してきて、私の研究の中心に近寄ってくる。さらには新たな自分の課題に取り入れられたこともあった。何事も目の前に置かれたものについては、とにかく一生懸命にやり通すことだと実感させられる今日この頃である。

赤祖父先生の学問に対する姿勢について述べさせて頂ければ、学問に励んでいるんだといったふうに、大上段に構え、肩をいからせた風情は微塵もない。飄々とごく自然体である。しかし、外面の自然体に目立たないけれども、内面には学問への情熱が燃え立っていたことは言うまでもない。この内面が、留まるところを知らない話題豊富な内容をひき出し、独特の雰囲気醸し出しているのではないだろうか。今も鮮明に残っているエピソードがある。ある新年度を迎えた四月に、新入生を含めて受講生たちが集まり、初回の演習が始まった時のことである。何か発言しなければならないという雰囲気が出来て、いろいろな参加者が適当に意見を交わし始めた。しばらくの後、中国文学の専攻の新しい院生がいきなり口を開いて、「受講をやめさせてもらいます。やはり餅は餅屋で、とても内容について行けません」と語った。それを受けて、先生が「大したことを言っているわけじゃない。我々をかいかぶらないように」とその院生を諭すような、それでいて開けっぴろげな調子でお喋りになっていた。あらゆる専攻畑の院生が先生の下に集い、好き勝手な発言をする点に、授業の魅力の一つがあった。時に先生からの叱責が飛ぶのは当然としても、むしろ賑やかな意見交換を喜ばれているように拝察できた。確かに私に関して言えば、これは楽しみであるばかりか、議論の中に身を置き、自分の固定観念を壊し、柔軟性を養うのに絶好の機会であった。(ただ自分に問うてみて、思ったほど効果を挙げたかどうかの点になると、少し怪しい。これは大いに反省すべき点で、今の私の課題でもあると思っている。)この例の場合は、ケムに巻かれたような院生に、大したことを語り合っているのではない、受講を続けたらいいのではないかと勧められていた。そのうちにケムが晴れて、理解の流れにのり、話の底が割れてくる。そうおっしゃった気なご様子に見て取れた。だが、それだけではなく、その発言の

裏にもう一つ背景があると拝察した。つまり、ただ前向きに挑戦して行くことを助言しているようにも感じられたのである。何事かに対面する時、そこには必ず何らかの感慨が生じるはずである。透明な理解に達しなくても、その不可解さをベースに自分の思いを語ることはできる。そこを演習に参加して育てて行けば、いいのではないか、という意味であろう。勝海舟の「行動は我にあり、批評は他人にあり」という言葉が心に湧いてきた。自分の意見を尊重して、そのことに対する他の批評は他人の事、二の次である。そういう良い意味での気概を持つようにということであろう。少なくとも私にはそう読み取れた。

それに関連して、別の折りに我々は研究していくしかない、先に進めていく以外に何も残っていないぞ、と聞かされたことがあった。八方塞がりの状況下であった私の身には、その言葉が力強く染み透るような気がした。そしてその時は嬉しかろうが、悲しかろうが、楽しかりょうが、そうした日々の気分は気分として、とにかく研究の道を歩む以上は、怠りなく日々勉強に励むだけだ、何にもましてそれが大切なのだ、という意味に受け取った。「真実一路」ならぬ「研究一路」、それも、ごく無手勝流の自然体で歩むことが先生の中核に居すわっているのだ、と傍目から解釈した次第である。愚見の相手をして頂きながら、いつも私の胸に、ある種の充実を感じていたのは、この姿勢にあるのではないかとひそかに判断している。純粹に学問上でのつながりが持てるから、私は楽しい気分ひたれるのだ。

自然体ということで思い出したが、飾らない人柄も先生を知るよすがとしてぜひ挙げておきたい。入学当初、土浦から筑波大行きバスに乗ろうとして、待っていると、ポンと肩を叩かれて、振り返ると、先生がいらした。大学までの途次、ずっと話し込んだわけだが、筑波大に来る前にいた別の大学院、あの緊張の走ったような大学院では、そういう経験はなかったし、望むべくもないことであった。それだけに、不思議とその後も記憶の底に残った「出来事」であった。「親しきなかにも礼儀あり」である。日ごろ礼を失してはいまいか、と危惧をしている。だが、先生には温かく接して頂いて、現在に至っている。もっとも、最近では本務校の雑務に教育に、その準備の勉強に追われていて、お目にかかる暇がついぞなく、失礼させてもらっているのが、残念至極である。

少々私事に引き寄せてしまったきらいがあるかもしれないが、私の筑波での院生時代においてかけがえのない師なので、おのずと私との係わりという観点で前面に出て、述べる結果となった。先生は研究指導を離れた所でも、留学生や院生、助手など随分と陰に日向に面倒を見られていた。そういう声をよく耳にした。現在名古屋で教職についている独文学の後輩も、現現の助手時代に思わぬお世話を頂いたことに驚きの声をあげると同時に、しみじみと感謝の念を口にしていた。大事な院生

時代、大袈裟に言えば、いろいろな意味でその後の生き死にが決まる時代に赤祖父先生に出会えて、本当に幸いであった。これは相当数の教職に携わっている元の院生、帰国して研究者になっている留学生たちの偽らざる思いなのである。深謝！——最後にはやはりこの言葉で、文章を締め括らなければならないだろう。